みなおと

No. 54

秋田大学教育文化学部・教育学研究科情報誌 2023. 8. 7

＜大学院特集＞

発見
創造

秋田大学教職大学院はどんなところ？

Q　教職大学院は、どのような大学院ですか？

A　教職大学院は、高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた力量ある教員の養成を目的とした専門職大学院のことです。全国の教員養成系の国立大学と一部の私立大学に設置されていますが、秋田大学教職大学院は、平成 28 年 4 月にスタートしました。

Q　秋田大学教職大学院の一番の特徴は何ですか？

A　最大の特徴は、「理論と実践の往還」を教育、研究、実習の中心に据えていることです。これを通じて、学校現場の課題解決、実践知の継承と創造に取り組むことができる教員養成を目指しています。そのため、秋田大学教職大学院では、秋田の高い学力を中心的に支えてきた経験豊かな実務家教員と、質の高い教員を養成しつつ秋田を含め国内外の教育実践を研究・支援してきた研究者教員が協同して院生の指導にあたっています。

Q　教職大学院には、どのような人が学んでいますか？

A　教職大学院には、学部を卒業してすぐの院生と、現職教員院生がいます。学部卒院生は、本学教育文化学部卒業の人だけでなく、他大学卒業の人もいます。また、学部卒院生の中には、学部 4 年（あるいは大学院 1 年）の時に教員採用試験に合格し、採用猶予（保留）の制度を活用して大学院に入学している人もいます。大学院在学中は教員採用試験のことを気にすることなく、研究や実習に集中して取り組めています。

Q 教職大学院ではどのようなことが学べますか？

A　秋田大学教職大学院には、学校マネジメントコース、カリキュラム・授業開発コース、発達教育・特別支援コースの 3 コースがあります。授業科目には、共通科目、コース科目、実践実習系科目などがあります。共通科目には、教育課程編成や教科等指導法、学校経営に関する科目があります。コース科目は、各コースの専門性を深める科目が用意されています。また、教職大学院で重視しているのが実践実習系科目で、10 単位分の実習が必修となっています。

Q　大学院の実習とはどのようなものですか？

A　学部卒院生の実習は、1 年次は附属学校園で、２年次は公立学校で行います。教科・学習指導とともに、自身の研究テーマに沿った調査データの収集なども行います。

Q　大学院は、授業科目の履修や実習で修了できますか？

A 修了するためには所定の 45 単位を修得する必要がありますが、その中には実践研究報告書（A４で８頁）の作成があり、審査を受けて合格することが必要です。

Q　大学院を修了すると、どのような免許が取得できますか？

A　所定の単位を修得することで、教職修士（専門職）の学位と専修免許状が授与されます。

Q　教職大学院は何年で修了できますか？

A　標準年限は 2 年です。なお、仕事の都合がある人などは、長期履修制度を活用することで、授業料は２年間分のまま、修業年限を 3 年、あるいは４年とすることもできます。また、学校マネジメ

ントコースに限っては、一定の要件を満たすことで、修業年限を１年とすることができます。

Q　教職大学院を修了して、どのような進路に進んでいますか？

A　これまでの学部卒院生は、皆さん学校現場で教員として働いています。現職教員院生の修了後は、教頭や主任、教育委員会の指導主事等として、学校や行政における管理的立場やミドルリーダーとして活躍しています。

Q　教員免許がなくても入学できますか？

A　幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の一種、または二種の免許状を有する人、あるいは大学卒業時に取得見込みであることが条件です。なお、大学院に入学後、さらなる免許の取得を希望する人は、教職チャレンジプログラムを活用して、学部の授業を履修することができます。その場合、学部の授業料は免除されます。

Q　学部と教職大学院には、つながりはありますか？

A　教職大学院に入学するには、大学院入試を受験して合格する必要がありますが、秋田大学教育文化学部の学生には、教員養成６年一貫プログラムが用意されています。学部の３年次に内部試験をパスすることで、学部４年次に大学院の授業科目を履修することができます。大学院の授業を先行履修することで、入学後の２年間は余裕を持ちつつ、研究や実習を行うことができます。教職大学院に入学した場合は、入学料半額相当の助成金を受給できます。

Q　教職大学院は、どれくらいの経費がかかりますか。

A　入学料が 282,000 円（予定額）、授業料が 535,800 円（同）です。教員採用試験に合格して、採用猶予の制度を活用して入学した人は、申請により、入学料相当額の助成金を受給できます。

設立 10 周年の節目に向けて

教職実践専攻長　田仲誠祐

教職大学院は、複雑・多様化する教育の諸課題に対応しうる高度な専門性と、豊かな人間性・社会性を備えた力量ある教員養成に特化した専門職大学院として創設され，次のような人材の育成を目指しています。

A 学校現場における職務についての広い理解をもって自ら諸課題に積極的に取り組む資質能力を有し、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員

B 学校現場が直面する諸課題の構造的・総合的な理解に立って、教科・学年・学校種の枠を超えた幅広い指導性を発揮できるスクールリーダー

秋田大学の教職大学院は平成 28 年に開設され，今年で８年目となります。上記 A,B の人材育成のため、学校マネジメント・協働力、カリキュラム・授業デザイン力、成長発達サポート力をバランスよく養成するカリキュラムを開発・改善してきました。これまでの卒業生 125 名は全員が教育界で活躍しています。学部卒生の卒業者 53 名の中には県外で教員をしている人も多数いますが、全国トップレベルの学力で注目される秋田の授業実践知を学んできた教員として赴任地では期待も大きいようです。また、現職教員生の卒業者は，教頭，校長，指導主事，管理主事等，秋田県教育のリーダーとして活躍しています。

本大学院では県及び市教育委員会と連携した授業も多く、指導主事や教育専門監の優れた授業力を学ぶ機会もあります。今年は現職教員院生の全県指導主事等協議会への参加も 3 年ぶりに復活しました。ポストコロナを迎え、いよいよ開設 10 年目に向け本大学院の真価が問われることになります。今後は，卒業生とのネットワークを密にしながら，さらなる発展を目指す所存です。日本の教育を共に牽引しようとする高い志をもつ方々の入学を期待しています。

激しく変動する時代のスクールリーダーの養成をめざして

学校マネジメントコース長　　佐藤修司

学校マネジメントコースは現職教員院生のみで構成されるコースです。これからの学校経営や学校改革を力強く推進できる組織マネジメント力を備えたスクールリーダーを養成するコースです。判定により、1 年プログラムで修了することも可能ですが、その場合は修了後 1 年間は継続的な指導と研究により、その成果を秋田県総合教育センターの教育研究発表会で発表することが求められます。これまでの教職経験を振り返りながら、より高度な教育専門職、スクールリーダーとしての役割を担うための深い学識と、卓越した実践力、経営力を身につけることができます。秋田県教育委員会が実施する全県指導主事研修会や教職員支援機構が行う教職員等中央研修に参加して、自らのキャリアアップにつなげることができます。

また、校種や教科の違いを超えた現職教員院生間の協働とともに、学部卒院生とともに学ぶことで、若手へ実践知を伝える力を身につけることができます。院生室では学校の職員室をイメージした机の配置や役割の分担がなされていて、学校の雰囲気を作りだしています。学部卒院生にとっては、メンター役を果たしてくれる、頼りになる存在です。

修了生の多くは修了と同時に教頭や指導主事・管理主事となっていて、その後に校長となっている人も多くいます。

以下は、実践研究報告書のタイトルの例です。

- 特別支援学校における地域資源を活用した授業の充実を図る方略の検討
- 学校自己評価分析を通した教職員間の協働性の構築に関する研究
- 協働型の校内研修と連動したキャリアアップシート開発－教職キャリア指標を用いた教員の資質能力の改善方策－
- 若手教員の研修を核とした教員相互に高め合う人材育プランの考察－小学校におけるメンター方式での研修と省察を通して－
- 学校教育目標の共通理解を促進するマネジメント－高等学校におけるグランドデザイン構築を通して－

子供たちの未来を支える教員の養成をめざして

カリキュラム・授業開発コース長　　長瀬達也

これからの予測することが難しい時代に、子供たちが自らの思考と判断で立ち向かっていける資質や能力を身に付けることができるよう、学校では様々な取り組みが加速化されています。総合的な学習が高校でも導入されて、最近では英語教育の小学校での本格的実施だけでなく、ＩＣＴ教育やプログラミング教育の導入なども、目に見える形で確実に進められています。この動きを皆さんも、日々の生活や学びの中で感じているはずです。

この主役は、もちろん子供たちです。日本のどこに生まれても、そしてどのような家庭に育っても、子供たち一人一人がこれからの時代に、主役として取り組んでいける資質や能力を身に付けることが、確実に保証されなければなりません。

教育の質保証に最も大切なことは、子供たちに毎日接し、学校での教育や人間形成に大きな責任をもつ教員が、これからの時代にも通用する豊かな見識と、どんな子供にも「わかった」と実感させることができる指導力をもつことです。

このような状況を踏まえ、本コースでは子供だけにとどまらず、保護者、そして社会全体からも信頼される教員の養成を目指しています。以下に，大きな特徴を挙げます。

- **大学の学部時代に学び，研究した教育関係の力を活かし、さらに伸ばすカリキュラムを目指して、「教科教育実践の理論と発展」「秋田型アクティブラーニングの授業とデザインと評価」「小・中・高連携の教科教育カリキュラムの開発」などの科目を設置している。**
- **現職教員院生（将来は校長，指導主事などになると期待される現職の教員）と共に、「ふるさと秋田の教育資源とカリキュラム開発」「秋田の授業力の継承と発展」「学校教育の現代的課題」などを学ぶことで，全国トップクラスの「秋田県の教育力」が身に付く。**
- **実践と理論の「往還」、教育現場での直接の学びを何よりも重視しているので、１年目 20 日間以上、２年目 30 日以上の学校現場でのインターシップが設定されている。**

従来の暗記や，ただ一つの「答え」に子供全員が疑問をもたずに向かう時代から，子供一人一人が自分自身の「答え」に向かう時代に向かっています。このことに意義と喜びを感じることができる方は、是非、私たちのコースで学んでください。

インクルーシブ時代の新たな教育の担い手養成をめざして

発達教育・特別支援教育コース長　　藤井慶博

子供たちをめぐる環境は大きく変化しています。子供たち自身の実態の多様化、家庭の在り方や養育環境の変容、社会の急速な変化等々・・・。また、少子化傾向が続く中、ここ 10 年ほどで、特別支援学級在籍者数は倍増、通教による指導を受けている児童生徒数は 3 倍に増加しています。さらに、小・中学校の通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒が 8.8%程度在籍しているといった報告がなされる（文部科学省、2022）など、特別支援学校や特別支援学級のみならず全ての学校種において、一人一人の教育的ニーズが大切にされ、全ての教員に特別支援教育や教育相談に関する知識・技能が求められるようになりました。

このような状況を踏まえ、本コースでは「学級経営、教育相談、特別支援教育等を担う高度な専門性を有する教員の養成」を目指しています。とりわけ以下の点に特徴があります。

- **大学教員の講義に加え、教育や福祉等の現場で先導的な実践を行っている方々をゲストに招いての授業を多く取り入れています。**
- **院生個々の研究テーマに迫ることができるよう、実習（インターンシップ・プロジェクト）受入校とのマッチングを大切にしています。**
- **日本特殊教育学会や日本 LD 学会等、主要な学会に大学教員とともに参加し、他大学の教員や院生との交流を積極的に行っています。参加のための助成制度もあります。**

修了後は、特別支援学校における専門性の高い教員、小・中学校の特別支援学級担任や通級指導教室担当として特別支援教育の中核となる教員、または通常の学級においてインクルーシブな教育の実現に寄与する教員として活躍しています。

学部学生の皆さんはもとより、将来教職を目指している高校生の皆さんも含め、インクルーシブ時代の新たな教育の実現を目指して私たちと一緒に学びませんか！

【院生によるコース紹介】

学校マネジメントコースの魅力

学校マネジメントコース　吉田英亮（現職院生）

よりよい教員を目指す学び合いの場

教職大学院の大きな特徴として、現場で教職キャリアを積み上げてきた現職教員と、学部を終了してきた学生が同じ環境で学び合うことがあげられます。同じ講義を受けたり、協働して授業を作り上げたりします。そうした講義・活動の中で、学部卒院生は、経験豊富な現職院生から学校現場の現状や課題について教えてもらったり、アドバイスを受けたりしながら、より実践的な学びを深めることができます。一方、現職教員院生も、これからの秋田県の教育を支える人材となる将来有望な学部卒院生から、多くの刺激を受け、ときには新たな気付きや学びを得ることができます。多様な背景を持つ学生が、よりよい教員、よりよい学校の実現を目指すために学び合う素晴らしい環境が整っている。それが教職大学院です。

現職教員院生は、小中高特支、全ての校種から教員が派遣されており、また、全ての校種での豊富な実習があります。それゆえ、自分とは異なる校種の教員と意見交換を行ったり、普段は接点のあまりない校種の学校現場について、優れた実践や理論に触れることができます。これらの経験により、ベテラン教員としての知見や技量をさらに高め、よりよい学校を経営する人材への成長を目指します。

教職大学院には院生室があり、それぞれ現職教員院生と学部卒院生とが混在する部屋割りになっています。この「疑似職員室」においては、現職教員院生は若手の指導・育成を意識し、学部卒院生はベテラン教員からの指導助言を仰ぎながら成長する絶好の場となっています。

長い教員経験を通じて私が感じていることがあります。当たり前のことですが、児童生徒のみならず、教員が成長するためにも「場（環境）」と「出会い」が非常に重要であるということです。教職大学院は、理論と実践を往還的に学び合うことのできる素晴らしい「場（環境）」であり、多様な人々との刺激的な「出会い」が約束されています。ここでは、日々よりよい教員を目指す学生の学び合いが繰り広げられています。

カリキュラム・授業開発コースの魅力

カリキュラム授業開発コース２年次　武石早穂

秋田大学教職大学院には、教員を目指す学生にとって、最適の学習環境が整えられています。私の所属するカリキュラム・授業開発コースは、たえず授業力向上のために学ぶことができるコースです。教科の枠を超えた様々なカリキュラム開発や、秋田県の探究型授業を基にした授業検討などに取り組むことができます。授業と日常生活の二点でお薦めするポイントをご紹介します。

授業では、院生同士の関わりがとても多いです。各自の専門性を生かしたストマス(ストレートマスター)同士の協議では、新しい見方や考え方を獲得することができます。さらに、現職院生の方々に直接質問したり、意見交換をしたりすることができるので、教育現場の具体的な問題解決に向けて、視野を広くして考えることができます。１年生で受講する「秋田の授業力の継承と発展」という授業では、ストマスと現職院生が一緒に授業をつくり、模擬授業を行います。私は算数科の模擬授業に挑戦し、授業づくりや教材開発の面白さに改めて気付くことができました。

次に院生生活についてご紹介します。ストマスと現職院生は３つの「院生室」に分かれて生活しています。同じ院生室のメンバーで、親睦会を計画するなど、学びあり笑いありの充実した毎日を過ごしています。現職院生の方々には、学校現場や教員生活などについても聞くことができ、じっくりと教員になるための心構えができます。現在は「班活動」も活発化しており、各班がより良い院生生活や、研修・研究のために協力して活動しています。

この他にも、TA としての学びや、研究発表会などのプレゼンの経験なども全て自分の力になっていることを実感しています。私の教職大学院での二年目の学びは、一年目よりさらに深いものとなっています。いつもそばで激励してくださる先生方や、志の高い院生の皆さんと共に過ごす日々が、来年度教育現場に出る私に自信を与えてくれています。

発達教育・特別支援教育コースの魅力

発達教育・特別支援教育コースについて、学部での学びとの違いに着目してご紹介させていただきます。学部での学びと発達教育・特別支援教育コースでの学びの違いとして、大きく３点挙げられます。

１点目は、現職教員の先生方から実践的なことを学べるところです。例えば、特別支援教育におけるチームアプローチについて、教育現場ではどのようなことに心掛けながら支援しているのか、地域資源をどのように活用しているのか、関係機関とどのように連携してきたのかなど、実際の事例をもとに検討することができます。

２点目は、実践の機会が多いことです。秋田大学の教職大学院では、週に１日の実習があります。１年次では、附属４校園（幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校）での実習や希望する附属学校での実習があり、２年次では希望する校種での公立校実習があります。実習校との都合が合えば、大学の長期休業期間にまとまった実習期間を設定することも可能です。定期的に実習があることのメリットは、大学院での講義で学んだことを実習で実践したり、実習で疑問に思ったことを大学院での講義で学んだりできるところであると考えます。さらに、教職大学院での実習では、省察コーディネーターの先生方と実習を定期的に振り返る機会もあります。

発達教育・特別支援教育コース１年次　伊東大樹

３点目は、研究についてより深く学べるところです。教職大学院では、研究について助言を頂けるグループリフレクションがあったり、講義の中で論文を読んで協議したりする機会がたくさんあります。私は、病気療養している子どもへの教育保障について研究しています。グループリフレクションでは、現職の先生方から現場の視点で病気療養児への学習保障の重要性を教えて頂いたり、調査の方法について新たな視点を得たりすることができました。

このように、発達教育・特別支援教育コースでは、理論と実践を往還したり、自分の研究したいことを深めたりする機会がたくさんあります。このような学びの環境を生かして、自分自身、分からないことを自覚し、学び続ける姿勢を大切にしていきたいです。

【教職実践専攻修了生からのメッセージ】

教職大学院の学びを経て

青森県三沢市立三沢小学校　教諭　工藤唯花
カリキュラム・授業開発コース 2022 年 3 月修了

秋田大学を卒業してから早くも 1 年半が経とうとしています。現在は、忙しくも充実した日々を過ごしております。秋田大学で過ごした 6 年間は、私にとって教師の仕事の基盤をつくり、視野を広げる貴重な時間でした。

私は 2016 年に教育文化学部こども発達コースに入学しました。こども発達コースでの学びは、「ゆっくりじっくり」であったなと思います。仲間と共に学ぶ中で、教育に対する知識を身に付け、考えを形成していくことができました。「教育は子どもの自立を目指し、そのために環境を整え、働きかけていくもの」という思いは、今の私の教育観の根底にあるものです。

4 年間を通して、幼児教育と小学校教育について学ぶ中で、子ども達の無自覚の学びが自覚的な学びへと変わっていく過程に強い興味をもち、小学校教諭を目指すようになりました。そして、幼児の遊びと深くつながる図画工作科にも興味をもち、卒業論文では、図画工作科の評価と指導について研究を行いました。これまで、「知識を入れる」ことをしてきた私にとって、「何かを明らかにする」研究は、全く初めての事でした。主担任の森和彦先生、美術教育専門の長瀬達也先生をはじめ、多くの先生からご助言をいただきながら、研究の基礎を学ぶことができました。

4 年次には、幸運にも青森県の教員採用試験の合格と同時に、秋田大学教職大学院の合格をいただくことができました。正直にいうと、私は「このまま教壇に立てるのだろうか」という不安が大きくなっていくのを感じていました。その不安な気持ちは、「もっと学んでから現場に出たい」という願いに変わり、教職大学院への進学を決めました。この大学院での 2 年間の学びは、私にとって重要なことであったと思います。

教職大学院では、教育現場でのインターンシップや、ティーチングアシスタントなどを通して経験を積み、自信をつけることができました。講義では、現職の先生方と様々な意見を交わし、チームマネジメントや危機管理などについて学ぶことを通して、教育をより広く、多様な視野から捉えることができました。そして、長瀬達也先生のもと図画工作科について研究を重ねるなど、とても濃い 2 年間を過ごすことができました。

現在は、小学校 1 年生の担任をしています。つい目の前のことで手一杯になってしまい、学んだ理論を実践に生かしきれていないなと感じることもあります。それでも、幼児教育と小学校教育の連携や、特別支援教育、保護者との関係づくりなど、6 年間で学んだことが、現在の実践に繋がっていることを実感しております。うまくいかない事も沢山ありますが、周りの先生方に支えながら教育を行っております。これからも、6 年間で学んだ理論と、日々の実践を結び付けながら子ども達と向き合っていきたいと思っております。

秋田市立秋田東小学校　教諭　嶋﨑友貴
発達教育・特別支援教育コース 2023 年 3 月修了

「せんせーい」

この後に続く言葉が楽しい、嬉しい内容の時もあれば，予期せぬトラブルの報告の時もあります。私が受け持つ学級では半々くらいの割合です。

文科省の調査によると、通常学級に在籍する児童の 8.8%が特別な教育的支援が必要であるとされています。私が受け持つ学級においても同様に，教育的支援が必要な児童がおります。学習面や生活面での多様なニーズがあり，一人一人の個のニーズに対して十分な支援をすることの難しさにいつも直面しています。その際，まず子どもの気持

ちを尊重し，寄り添うことです。子どもの言葉や態度に共感し，その上で提案や支援をすることを心掛けています。また最近では，子ども同士で声を掛け合いながら支え合う姿が見られ，子ども同士の心温かい関係性を育むことの大切さを学びました。子ども達が心地よい学級になるよう，ICF 註）の環境因子にも気を留めながら学級運営を進めているところです。

大学院は実践だけでなく研究が必要なので，研究のことについて触れておきます。研究に関して言えば、学部の時も大学院の時も得意ではありませんでした。そのため，いつも「僕に研究は向いてないな」と苦手意識を抱え、自信がない学生でした。そんな私の姿を受け、先生方は「今できること」を出発点に指導してくれました。また「困ったらいつでも来てください、待っています」と温かい言葉も頂きました。おかげさまで、研究を一つの形にすることができ、卒業、修了することができました。不得意なことを得意にすることも大事ですが、できることをきっかけに、できそうなことにチャレンジしたことで、相対的にできることが増えたように感じます。この経験から、私が教師という立場になった今、子ども達にも「得意なこと，好きなこと」をきっかけにした肯定的な指導や対応を心掛けています。このような心掛けができた背景には、本学での学修や生活が充実していたということは言うまでもありません。

註）ＩＣＦ（国際生活機能分類）；正式名称を「生活機能・障害・健康の国際分類」と言い、2001 年にＷＨＯにより制定された。人の生活機能と障害について 6 つの構成要素に分け、それらが相互に作用し合って人の健康状態が規定されるという考え方を示している。

7/29 オープンキャンパスの風景

学部全体説明会の参加者は約９９６名で、各コースの企画への参加者は延べで約１７８２名でした。

大学院心理教育実践専攻で学び，心理専門職としてはばたく

心理教育実践専攻は 2002 年から本格的に心理士養成を始めました。当時，東北地方で最も早く臨床心理士養成第一種指定大学院を取得した大学でした。以来，およそ 20 年にわたり 100 名をゆうに超える心理専門職を社会へ輩出してきました。現在，大学院の教員は６名で，大学院生の指導にあたっています。

柴田健 教授：専門は臨床心理学。秋田県中央児童相談所，弘前大学を経て本学に着任。ブリーフセラピーや家族療法の実践的研究に従事。

中野良樹 教授：専門は学習心理学，生理心理学。研究テーマはパズルゲームでの「ひらめき」から小学校生活科の授業研究まで幅広い。

北島正人 教授：専門は医療心理臨床。首都圏での病院勤務の経験を生かし，教師のバーンアウトや秋田刑務所での共同研究など実践的課題に取り組む。

木村久仁子 准教授：専門は福祉心理臨床。県内児童相談所や福祉施設など公的機関に勤務の経験を生かし，福祉現場における「支援者への支援」が研究テーマ。

綾部直子 講師：専門は臨床心理学，特に認知行動療法。国立精神・神経医療研究センターに勤務の経験を生かし，睡眠障害の認知行動研究の傍らスクールカウンセラーもこなす。

侯玥江（ホウ・ユエジャン） 講師：専門は発達心理学，教育心理学。調査・統計法にも詳しい。生徒の学校適応と不登校に関して学校現場での調査研究を行う。

臨床心理相談室でのカンファレンスの様子

６名の教員は経歴，専門分野から年齢，出身地までバラエティーに富んでいます。多様な背景をもつ教員が一つのチームとして，大学院生一人一人の個性や興味・関心，志望をふまえた指導にあたっています。授業では幅広い専門領域の基礎から応用まで確かな知識・技能を修得し，一方，県内の医療・福祉機関では長期の実習を行い心理臨床の実践力を高めます。修士論文では手厚い指導のもとに自身の興味・関心を専門研究として追求するだけでなく，学会で発表できる内容と完成度が

修士１年生の一週間
２年生は実習と修士研究が主になります

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1・2	発達心理学特論		障害児支援におけるチームアプローチ		臨床心理基礎実習
3・4			電話実習		
5・6		臨床心理学特論Ⅰ		臨床心理査定演習Ⅰ	発達障害の事例分析と対応策の検討・評価
7・8			生徒指導特別演習	カンファレンス（月2回）	
9・0		心理学研究法特別演習	研究方法ゼミ（論文指導）		教育分野に関する理論と支援の展開

臨床系の授業は、現場ですぐに役立つ知識を身につけられるよう配慮されています。

「心理学研究法特別演習」はパワーポイントやポスター、紙資料による研究のプレゼンテーション技法やその基礎知識、および研究テーマに関連した研究論文の読み込み方を互いに議論し合いながら学びます。

「臨床心理基礎実習」では面接のロールプレイを通して、面接の技法を学びます。また、集中講義では各領域のエキスパートの先生方とディスカッションができます。

「カンファレンス」は担当しているケースを検討する場です。教員・院生全員の意見を聞けるので大変参考になります。また1年次の後半から、臨床心理相談室関連の業務担当が多くなり、本格化します。教員の面接に陪席したり、実際にケースに入ったり、臨床の腕を磨く機会が多くなります。

求められます。確かに，大学院の２年間は多くのことに並行して取り組み，多忙な毎日を過ごします。しかし，この充実した日々が，必ず社会に出て心理専門職として活躍する土台になるのです。

本専攻の修了生たちは精神科や小児科などの医療機関，教育委員会（スクールカウンセラー）や児童相談所，養護施設などの教育・福祉領域，県警察署や地方自治体の公務員など，幅広い分野で活躍しています。働く場所も首都圏から北海道まで全国各地にわたり，東日本大震災の折に三陸地方の福祉施設で支援と復興に力を尽くした人もいます。専門職として働く長所に，「どこで何をして働くか」を自分で決められることがあります。県内外の現場で経験を重ね，地元の自治体に子育て・福祉担当の職員として戻った人，新しい福祉施設の立ち上げに中心的な役割を果たす人，個人で相談室を開設してフリーでスクールカウンセラーなどを請け負う人，多くの修了生が自分の意志でキャリアを高めています。こうした先輩たちが，今，実習先で現役院生の指導に力を貸してくれることは，とても心強くまた誇らしく思います。

幅広い分野で活躍する心理専門職の、学びと生涯の支えとなる場として

心理教育実践専攻長　北島 正人

この特集をご覧になっているのは，将来，公認心理師・臨床心理士といった心理専門職として，人々のこころの健康に役立つことを目指している方々でしょう。

心理教育実践専攻では，専門的知識を学び，実践のための具体的スキルを身に着けてもらうため，修士１年では児童相談所，主に不登校のお子さんの支援を行う適応指導教室における短期実習を実施しています。修士２年次では，１学生１機関を割り当て，約１年間の医療機関での長期実習を義務付けています。また，その他に刑務所，少年鑑別所等の矯正機関での実習があります。このように，様々な分野における「現場」を体験した上で，本物の臨床の緊張感と業務の実際を学び，自らについて内省し，修了後の自分がどのようになりたいかをイメージしながら，主体的に取り組むことができます。また，附属の臨床心理相談室では，教員指導のもと，大学院生が治療ケースを担当し，その取り組みについて教員による個別の指導，全体でのケース・カンファレンスを通じて，対象者や彼らを取り囲む状況を多角的に分析するアセスメント力を身に着けます。こうして専門的知識と実践スキルを往還しながら，実際的な臨床力を高めていきます。

もちろん，心理臨床における科学者―実践者モデルの理解にもとづき，高度な実践力と省察力の基礎として，研究は欠かせません。教育・福祉・医療，司法矯正等，様々な領域で教師・児童生徒，職員などを対象に，貴重な現場のデータを収集することができます。机上では得られない，現場のデータを目にすることで，臨床の実相を明らかにし，それに基づいた効果的な心理支援を見出していくことができます。

そのために基礎心理学領域の教員，臨床心理学領域の教員が日々協議し協働しながら，学生指導に当たっています。大学院を修了する際には，必ず通用するという自信を携えて現場に飛び込むことができ，修了後は，困ったときに教員や先輩たちに相談できる環境があります。心理専門職として生涯学び続けたい，伸び続けたい皆さんの入学を心よりお待ちしております。

【院生によるコース紹介】

心理教育実践専攻コース紹介

心理教育実践コース　修士２年　若松紗莉

心理教育実践専攻の学生は，授業や研究に加え，熱心に取り組んでいるものに実習があります。Ｍ１では児童相談所や病院の精神科，Ｍ２では小児科，精神科，フリースクールなど多様な外部実習に恵まれています。外部実習だけではなく，心理教育実践専攻には『臨床心理相談室』というものがあり，学生主体運営が基本であり，内部実習機関となっています。ちなみにどのくらいの時間実習を行っているかというと，私はＭ１の１年間で 200 時間を超える実習を行っていました！Ｍ２では６月時点で 100 時間を超えています…。

このような多様な実習は，大学院卒業後に即戦力として働けるようになるという目的があります。実際に，外部実習では，学生のうちから自分が将来働く可能性のある現場を見て，関われる貴重な機会をいただいています。また内部実習では，実際に悩みを抱えたクライエントさんが来談し，有料で面接をするという，より実践に近い形での面接を積み重ねています。そして実習で得たこと，考えたことを仲間と共有し，話し合う時間もまた，学びの１つとなっています。

ハードな面はありますが，少人数という特性を活かし，仲間と支えあいながら日々を送っています。2 年間という短い期間ですが，この貴重な経験を最大限利用して学んでいきたいと思っています。

心理教育実践コース　修士１年　杉山ひなた

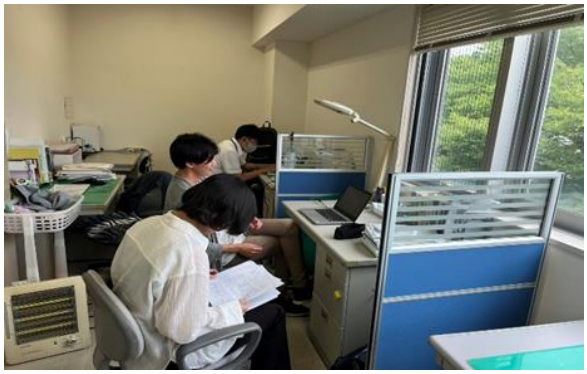
心理教育実践専攻は教育、医療、福祉等の分野で活躍する心理専門職を目指す人たちが集まっています。公認心理士・臨床心理士資格に必要なカリキュラムが提供されており、心理専門職として働く際に必要な専門知識と技能を学ぶことができます。

一年生の前期は学内の授業で構成されており、日々授業準備や課題を同期と協力しながら進めています。学部生の頃は、学生の人数も多かったことから受け身的な授業が多かったですが、院での授業は学生が主体となり能動的に動く力が求められています。

授業は、現場で役立つ心理学の知識や技能に関する内容のみならず、研究のプレゼンテーション技法や研究の基礎知識を学ぶものもあり、修士論文の執筆や学会発表に生かすことができます。また、面接のロールプレイを通じて面接の基本的な技法を学ぶ授業もあります。面接を逐語に起こし、言葉の言い回し・伝え方の振り返りや、撮影した動画を見ながら非言語的な面の振り返りをします。自分の面接を先生方や同期に見られることはとても緊張しますが、先生方は面接に関してアドバイスだけでなく、良かった点も伝えてくださるため自分の強みと弱みを把握することができます。

授業以外に月に 2 回、担当するケースを検討するカンファレンスがあります。教員・院生全員が参加し、多様な考え方に触れることができます。一年生の前期は、ケースに直接関わることがないため、カンファレンスでのケース検討は大変貴重な機会となります。

最後に、院で過ごしてまだ 4 か月ですが、正直、大変だと思うこともたくさんありました。しかし、日々の学びは知識や経験となり今後の臨床活動に必ず役立つものであると思っていますし、私たちの学びが力となるよう先生方がサポートしてくださっています。後期からは学外実習や実際のケースに触れる機会が増えていきます。より現場に則した内容になっていくため、将来を見据えながら学びを深めていきたいです。



【心理教育実践専修時代の修了生から】

鶴光代先生からの学び

児童発達支援・放課後等デイサービスらーそ管理者　片倉智子（2006 年 3 月修了）

2005 年度に修了し、現場に出て 18 年となります。2018 年に障害児通所支援施設「児童発達支援・放課後等デイサービスらーそ」の立ち上げに携わり、管理者を務めて 5 年目となりました。障害児通所支援とは、発達の気になるお子さんが通所され、個別または集団の療育支援を受ける場所です。事業所での支援にとどまらず、在籍するこども園や学校に出向く訪問支援も行っています。「らーそ」とは、スペイン語で「つながり」という意味があります。お子さん、ご家族、地域、関係者をつなぎ、切れ目のない支援を通して未来へつなぐという思いが込められています。

らーそには、お子さんと保護者の方が一緒に来所されます。実際の指導は児童指導員のスタッフにお願いしていますので、管理者は保護者の方に必要に応じてお声がけし、療育の様子を見ながら課題内容の説明や、日常生活の様子の情報共有を行います。別室で相談対応をすることもあります。内容は、お子さんの対応、就学相談、ご家庭に関することなど多岐にわたります。発達支援の難しく興味深いことは、特性も課題も、一人ひとり全く違うということです。ご家族との対話を通じて、生活全体を具体的にイメージし、より的確な目標設定を行うことが、療育の効果を上げること、ご家族との信頼関係を築くことにつながります。

また、指導員と支援方法について協議や指導を行うことも業務のひとつです。らーそには、心理職、保育士、教員経験者、リハビリ職など、複数の専門職のスタッフがいます。それぞれバラバラに支援を行うのではなく、共通のアセスメントツールを用いて支援計画の立案を行います。多分野のスタッフが一緒に協議をすることで、発達に関する幅広い領域をカバーした療育を提供しています。「必要なことは何でもやります」といった姿勢が、らーそのオリジナリティです。

学生のみなさんは、今、どういった信念で現在の道に進んでいるでしょうか。私は学生時代を通して、興味のある領域はありませんでした。こどもや障害児の臨床についても、現場に入ってから独学で習得しました。心理学の道を志してから一貫してあったのは、「意味のあることをしたい」という欲求でした。らーその支援の在り方は私の臨床の姿勢が形になったものです。

修士時代は鶴光代先生の下で学びました。鶴先生との学びで一番記憶に残っているのは（一緒に栗駒温泉に行ったのも大切な思い出ですが）、プレイセラピーを担当して初めてのＳＶの時でした。私が一言目、「〇〇さんとお部屋に入り、おもちゃの入っている棚を開けたら…」と伝えたところで、「どうして棚をあけたのかね？」と問われ、頭が真っ白になりました。“どうして棚を(セラピストが)開けたのか”ということに答えを見出し議論するだけで、30 分以上かかったのではないかと思います。今となれば、お子さんの自発的な動きや反応をみてから対応することの大切さを説いていただいたと理解できるのですが、当時の私には禅問答のように聞こえていました(笑)。

先生はよく「どうして？」と問われていました。自分や他者の行動や反応の意味や意図を考え、それを言語化することを促されました。それは、“意味のあることをしたい”という自分の理想像に近づくために、とても重要な作業でした。言語化をすることで、自分の思考を整理・体系化することができ、不足している知識やスキルを補うことや、有益なアイディアを生みだすことにつながります。

私は今でも、「どうして？」を考え続けています。自分のしている支援は、ご家族、スタッフ、関係者に、言葉で説明でき、意味あるものとして受け入れてもらえるものか？その繰り返しが、間違いなく臨床のスキルを高めてくれています。

皆さんも大学での学びを通して、社会生活での自分の芯となる思考の方法をぜひみつけてください。必ずやあなたの人生を支えてくれますよ。

大学院生時代（前列左端が筆者, その右が鶴先生）

療育の風景

秋田学と白神学と地域連携―学部の歴史をたどる㉔

1998 年改組における地域科学課程や、2014 年改組の地域文化学科の名称に見られるように、本学部にとって「地域」は重要なキーワードになっています。この地域は、秋田（県・市）に限定されるものではなく、ブロック単位、国単位や、さらに EU やアジアなどのように、多様性を持つものととらえられます。そして、グローカルという言葉に表されるように、グローバルに考え、ローカルに行動する（Think globally, act locally）わけですので、国際的、地球的な視点は欠かせません。

本学部では、「秋田学・白神学」に 2007 年から取り組んできました。この 10 月に、秋田県から「秋田学構築のための調査研究」についての受託研究申請がきっかけとなり、「秋田学の構築に関する研究会」が 12 月に発足します。これが 2009 年に秋田学・白神学研究会となり、さらに 2012 年 5 月に秋田学・白神学研究運営委員会となりました。

2007 年 10 月に掲げられていた研究目的は、「道州制への移行を見据えつつ『元気なふるさと秋田づくり』の推進に向け地域アイデンティティを高め、県民が郷土に誇りと愛着を持ち、自信を持って秋田を語れるようにするため、秋田の自然・風土・文化・歴史などについて、体系的に整理するとともに、県民が親しみをもってアプローチできるようなしくみを構築する」ことで、今にも通じるものです。2010 年度には計画推進経費として、「秋田学・白神学の知の構築と地域社会への環流の取り組み」が採択され、また 2010 年度に始める第 2 期中期目標・計画における本学部の重点的取り組みと位置づけられました。

当時は「地域学」が注目を浴びていて、東北学など多様な地域学が主張されていました。白神山地が世界自然遺産に 1993 年 12 月に登録されたことをきっかけに、白神が注目されます。4 号館改築にともない 1 階東側に「白神研究・教育機構」のスペースが設けられていました。

秋田学・白神学の取り組みは、最終的に 2015 年 12 月のミニシンポジウム、翌年 1 月に成果報告書補遺版の発行をもって活動を終了していますが、その蓄積は 2014 年度から地域文化学科の地域連携プロジェクトゼミや、秋田学基礎、地域学基礎などに生かされています。また、2022 年度からの第 4 期中期目標・計画期間では、「秋田創生学」を本学部の重点としています。

秋田学・白神学の一環として、2010 年度から、秋田県内の自治体・教育委員会、民間企業、NPO 法人等との連携・協力による地域教育への貢献および研究成果の地域社会への還元を目指して、卒業論文等のテーマを自治体等から公募する事業を開始しました。2018 年度からはパイロットリサーチプロジェクト－学生による調査・実験テーマの公募－」と銘打ち、略して「ＰＲプロジェクト」を展開しています。地域の協力を得ながら学生が指導教員のもと卒業研究として取り組むものもあれば、テーマに関連する授業において、受講した学生が教員とともに研究に取り組むものもあり、いずれも、学生と教員とが協働して多彩な研究を展開してきました。さらに加えて、教員が自治体や企業からの要請に応えて取り組む研究も行っています。

ここ数年では以下のようなテーマがあります。

- 自治体のオープンデータの公開状況とその利用の促進について
- 大仙市産日本酒商品に関するマーケティング手法の研究
- 日本白色種秋田改良種（中仙ジャンボうさぎ）の飼料改変による付加価値向上と活用性の検討
- 由利本荘市岩城地域における文化的体験機会の現状と創出について
- 500 歳野球大会がもたらす中・高齢者の健康増進効果について
- 災害時の外国人支援のために必要な外国人のニーズ調査
- 秋田市の女性の活躍推進に関する

状況の調査と分析

また、学部として地域連携を進めるために、教育委員会以外では、秋田刑務所（2028/2）や秋田県中小企業家同友会（2018/10）と連携協定を結んでいます。さらに、自治体、企業の方に集まっていただき、地域連携懇談会を2018年11月8日に開催し、その後も毎年1回程度、同様の会を、新型コロナ後はZoomを活用しながら開催しています。

【文責：佐藤修司】

2014年学部パンフレットより

秋田学・白神学について

秋田には、様々な文化的価値を持ったものがあります。その中には、まだ私たち自身、その価値に十分に気づいていないものもあるでしょう。そのようなものを見いだすためには、秋田県の自然や文化を、学術的にそして多角的に捉え直す必要があります。すなわち、秋田県各地における地域生活の知恵を学術的に相対化・客観視し、そのよき英知を継承することを考えるのです。全国標準・世界標準の見識を参考に、秋田らしさ、その土地らしさを重視した地域学の創造です。最終目標は大げさに言えば「秋田型地域生活モデル」の提唱です。

教育文化学部では、7年間にわたって、各教員有志の努力と自主的な研究連絡組織の活動により、「秋田学・白神学」と総称されるような地域学研究を進めてきました。地域を総合的に理解するためには、狭い専門分野の研究蓄積だけでは不足で、様々な専門分野の研究者の連携協力と情報交換が欠かせません。教育文化学部にはそのような多彩な研究者が揃っています。

これまで「秋田学・白神学」に携わった研究分野は、社会学、歴史学、民俗学、日本語学・方言学、社会科教育学、音楽、気候・気象学、天文学、地質学、水文学、植物学、生態学、栄養学、生活科学、情報科学などです。研究対象あるいは活動課題は、中山間地域における高齢者社会、古代の秋田、秋田の祭り、地域振興・文化調査、秋田のことば、秋田の民謡・音楽教育、天文教育「白神の星」プロジェクト、巨大噴火と古代遺跡、ジオパーク、火山地域の湧水・地下水、地衣類による環境評価、アケビ油の商品化、秋田大学版いぶりがっこ「いぶりばでぃ」製造など、実に多様です。また、白神山地の麓の八峰町には、元小学校舎を借り受けた研究拠点もあります。

秋田駒ヶ岳での実習風景

「秋田学・白神学」が貢献しようとするのは、次のような地域生活です。①自然と伝統を生かし、最小限のエネルギーと資源・金銭で実現する、持続的文化的な地域生活。②高齢社会に対応し、若人・幼年者を大切にし、必要な知恵と環境を次世代に継承する地域生活。いずれも従来の都市型消費生活とは異なり、地域と生活の持続性を重視し、実践的生活観・価値観の変革を伴っています。

今後はさらに広い専門分野の教員が組織的に参加・連携できるよう、そして何よりも現場で地域住民の方々からより多くを学ばせていただけるよう、研究環境を整備して「秋田学・白神学」の一層の実体化を図ります。また、地域創生センター（本部地域創生課）と北秋田分校および横手分校と連絡をとりつつ、各教員・学生の研究が充実するような場・環境作りを心がけていきます。その結果としての研究成果は、各教員の研究業績になると同時に、教育文化学部の「地域学」関連の授業内容に確実に反映されるでしょう。

鳥海山・獅子ヶ鼻湿原

【学部創立 150 周年：教育研究・運営カウンシル外部委員の方々からのメッセージ】

「つながり」と「かかわり」

秋田県教育庁　教育次長　和田　渉

今年（2023 年)で創立 150 周年を迎えた教育文化学部、併せて創設 35 周年となる大学院教育学研究科の節目の年に寄稿できることをとても嬉しく思います。本県の教員の多くを輩出してくださっている教育文化学部関係各位に心から感謝申し上げます。卒業生・修了生の方々は、各学校（園）の中核として活躍されており、教育行政においても、今最も必要とされる企画力と実行力を存分に発揮し、新しい時代の「教育立県あきた」を実現する原動力となってくださっています。

本県で推進している「秋田の探究型授業」は、児童生徒の主体的な課題解決を重視し、思考力・判断力・表現力等の育成を図る授業ですが、探究型の授業の源泉は、秋田大学の質の高い教師力養成にあると思います。そして、卒業後もその力は学校での組織研究や共同研究によって更に鍛えられ、日々の授業実践を通した子どもたちの高い学力の定着とともに、満足感と成就感を得た生き生きとした子どもたちの姿となって結実しています。

また、各校の授業研究会では、熱心な討議が行われ、課題の共有と協働による解決へ向けた真摯な姿勢が学校組織の連帯感を強め、教師一人一人の指導力を高めています。こうした学校風土は、秋田大学教育文化学部出身の先輩から後輩へ連綿と続く繋がりと関わりが根底にあり、県全体へ波及したと言っても過言ではありません。

「つながり」と「かかわり」と言えば、私自身、人生の節目に極めて大切な言葉をいただいてきました。中学校で初めて卒業生の担任となったとき、当時の学年主任から言われた言葉は、「子どもは何を習ったかは忘れても、誰に習ったかは忘れない。」教師の崇高な使命を再認識させられました。義務教育課管理主事として教育行政に携わることになったとき、当時の課長から「威張るなよ。頭を下げているのは立場に対してで、あなたに対してではない。」と言われました。謙虚さを失うと信頼をも失うと肝に銘じた瞬間でした。校長として初めての集会で児童を前に話し終えた直後に先生方から言われた言葉。それは、「校長先生、子どもたちには短く言って、深く感じさせてください。」まさに私の欠点を突く的確な助言となりました。

これまで出会った上司や同僚の方々から折々にいただいた言葉は私の人生訓となり、機会を捉えて次の世代の教員へ継承するよう努めています。

萌え出た芽を伸ばすには、雨や土、日光が必要です。どれも、直接の栄養分ではなく、その芽が伸びようとする内なるエネルギーを引き出すものです。教師が子どもたちに関わることができるのは、数年です。その限られた数年、教師は一掬いの雨や土や日光となって、子どもたちの成長を慈しんでいくものと捉えています。

教育に必要なのは、指導技術の巧みさに加え、教師の豊かな人間性と心のゆとり、そして笑顔です。改めて教師としての道を歩んでいる私自身を幸せに思います。

学部・研究科の活動（2023 年 5 月～7 月）

【全学】

7/18：7/15 の豪雨により秋田市全域、五城目町などで浸水被害があり、休講措置。7/19 にも豪雨で浸水被害、土砂崩れが発生。

7/29：オープンキャンパス

【学部】

6/30：対面によるカウンシル開催

7/25～8/18：社会教育主事講習

【教育学研究科】

5/24：教職大学院部会・省察実習専門部会

6/30：大学院説明会オンライン

【附属学校園】

6/2：附中公開研究協議会

6/9：附小オープン研修会

6/26：附幼公開研究協議会オンライン

7/20：附属学校運営会議

7/26：附属学校地域協働協議会

【学部創立 150 周年：教育研究・運営カウンシル外部委員の方々からのメッセージ】

未来の秋田に向けて

秋田県あきた未来創造部次長　今川　聡

日頃から、教育文化学部、教育学研究科の教職員の皆様には、学力全国トップクラスである本県の教員養成を担うとともに、県内企業人、公務員の輩出にご尽力いただいており、深く感謝申し上げます。また、教育文化学部、教育学研究科の学生、院生の皆さんは、将来の職業観を持ち、日々勉学・研究に励まれていると考えております。

ご承知のとおり、私が所属する県庁では、本庁舎、各地域振興局などで、貴大学ＯＢ・ＯＧの皆さんが、教員をはじめ、教育行政、一般行政など事務職等で活躍されております。皆さんの約６割は、県内出身者と伺っており、既に、教員試験に挑んでいる方、就職活動中の方々とともに、これから教育実習やインターンシップに取り組む方も多いと思います。

その際、学校現場や県・市町村、各事業所などで、ＯＢ・ＯＧの方に加え、恩師とも、お会いしたり、職場を訪ねる機会があるものです。是非、皆さんから積極的に声をかけてみてください。ＯＢ・ＯＧの方、恩師から、皆さんへの励ましの言葉をいただくだけではなく、相手の方にとってもたいへん仕事の励みになります。

私は、県外大学出身ですので、インターンシップで訪れる大学後輩がほんの少ししかいませんが、他大学の方々と一緒にいる中でも、特に、声をかけているところです。近い将来、皆さんが、学生、院生生活の集大成として就職、就業の希望がかない、目指している教員や企業人、公務員、又は起業家となられ、ご活躍されていることを期待しております。

さて、私が所属する「あきた未来創造部」は、少子化・人口減少対策、高等教育（大学、短大、専修学校等）、女性活躍、移住・定住、地域づくりなどを所管しています。特に、少子化・人口減少対策は、全国的に人口減少が進む中、減少幅の大きい秋田が全国の先頭に立ち、様々な施策を展開しているところです。

皆さんに身近なところでは、就職支援として、秋田県就活情報サイト「KocchAke!」による情報提供、県内の民間企業就職者に対する奨学金返還助成、中学生・高校生への県内企業等の説明会に加え、ふるさと教育、賃金・職場環境の向上、仕事づくり、移住・定住、結婚・出産・子育て支援などを総合的に実施しております。

こうした中、高齢化、少子化による自然減は、長年の積み重ねによって生じているため、すぐに改善できるものではありませんが、県外との転出入による社会減は、政策の効果が一定程度表れており、抑制が徐々に進んできていると感じております。特に、皆さんが含まれる１５～３９歳の若年層の社会減が一層改善し、次の世代へのバトンタッチができるよう、更なる施策を展開していきたいと考えているところです。

これから多くの皆さんが、秋田の地で学んだことを糧に、様々な立場から、私どもが取り組む人口減少対策に加わり、次の次の世代が秋田や地元企業を知り、将来も、秋田で働き、暮らして良かったと思えるよう、努力してまいります。県外で活躍する方々には、是非、秋田とのつながりを持ち、秋田の応援団として、観光や物産、県人会のほか、移住、教育、或いは産業振興のパートナーとして後押しをお願いいたします。

結びになりますが、皆さんの学びや研究が一層深まり、「大学で学んだこと」のひとつに、自信を持って、教育現場や地域活動での人とのつながりや、地域に根ざした産業、受け継がれてきたお祭り・文化の研究などを答えていただけることを願っております。

発行　**秋田大学教育文化学部／教育学研究科**
〒010-8502　秋田県秋田市手形学園町１－１　　TEL 018-889-2509　FAX 018-833-3049
教育文化学部・教育学研究科ＨＰ　http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/
学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html
教職大学院通信「暁鐘の音（かねのね）」⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html
＊誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌（1910 年制作）を聴くことができます。
http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html をご覧下さい。